

阿部金剛 《郷愁》

日本のキリコ・阿部金剛

阿部金剛と言えば、東郷青児とともに「新傾向」絵画の代表として注目され次々と実験的な作品や詩を発表し、超現実主義運動の旗手となった異才だ。盛岡市生まれ。元東京府知事・阿部浩の長男である。岡田三郎助に師事し油絵を習い、大学を中途退学して大正一五年渡仏、ピシエールの指導をうけるかたわら、藤田嗣治やキスリングからも影響をうけた。昭和二年帰国後は四年以来《D.O.C.》など超現実主義的な作品を二科展に出品、二科会員となり、さらに昭和三五年から四二年まで、メキシコやアメリカに滞在、制作した。わが国の超現実主義絵画のパイオニアの一人で、『シュールレアリズム絵画論』（昭和五年六月、天人社）や『阿部金剛画集』（昭和六年九月、第一書房）などの著述、作品集がある。装幀に萩原朔太郎『詩人の使命』、安西冬衛『韃靼海峡と蝶』『亜細亜の鹹湖』などが知られている。

阿部金剛の現存している戦前のシュール作品は極めて少ないが、この作品は全盛期の作品である。定規で引いたような緊張感のある無機質な作品が一般的に知られているが、この作品のようにフリーハンドの微妙な揺れのある有機的な仕上がりとなっている作例は珍しい。またキリコの日本での受容を考える上でも重要な作品であろう。東京国立近代美術館の大谷省吾氏が『阿部金剛・イリュージョンの歩行者』（一九九九年）を出されており、阿部金剛を知る上での決定版である。最後に、先輩コレクターがこの絵を見ての一言……「男の書斎画としては一級の格とセンスがあるね」

平園賢一（神奈川県平塚市）

阿部金剛 《郷愁》

油彩・キャンバス 24.3 × 33.4cm 1932年

Abe Kongo *Nostalgia*



阿部金剛（あべ・こんごう／1900 - 1968年）

盛岡市生れ。父は阿部浩東京府知事。慶應義塾大学中退。岡田三郎助に師事。1926 - 27年渡仏。29年二科展に初入選。47年二科会会員。60 - 67年メキシコ、アメリカに滞在。東京で没、68歳。

普門 暁 《アンナ・パヴロヴァ（瀕死の白鳥印象）》

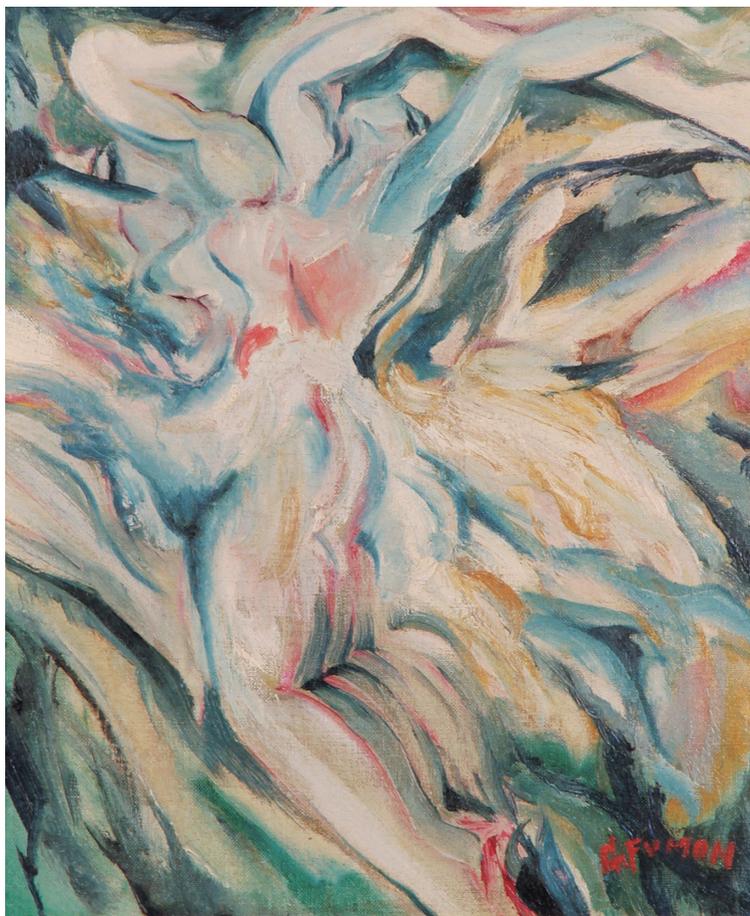
大正期新興美術史にのこる奇跡的な発見！

大正期新興美術史におけるの新発見である！この幸運に感謝したい。明治二十九年八月十五日、奈良市に生れた普門は生後間もなく東京に移り、青年期を迎えて画家を志望した。一九一〇年代イタリアのミラノに起った未来派の美術運動に刺激影響を受け、大正九年秋、みずから首唱者となって未来派美術協会を創立し、以来数年にわたってわが国における前衛美術運動の口火を切って活躍したことは、日本近代美術史上の特異な存在としてよく知られている。しかしながら戦後は帰郷してほとんど中央での活動がなく、一般に知られるところが少なかった。未来派の先駆けとして重要な作家である普門だが、その大正期の作品は二点（奈良県立美術館と京都国立近代美術館に一点ずつ）しか現存確認されていない。ましてやその二点とも「鹿」の絵であり、現存確認された人物画はこの作品が初めてであろう。この作品は一九二二年にアンナ・パヴロヴァの来日初公演を見ての作品であり、普門の感動がダイレクトに伝わってくる名品だ。資料的にも非常に貴重であり、今後は普門のみならず大正期新興美術研究においても興味深い内容の作品となろう。

〈専門家の意見〉

現存する一九二〇年代初期の普門の作品として貴重です。画題が一九二二年に日本公演を行なったパヴロヴァというのも興味深いことです。しかも彼女のために振付けられた「瀕死の白鳥」を踊っている場面ということで二重に興味深い作品です。

平園賢一（神奈川県平塚市）



普門 暁 《アンナ・パヴロヴァ（瀕死の白鳥印象）》

油彩・キャンバス 45.5×38.0cm 1922年

Fumon Gyo Anna Pavlova (Impression of the Dying Swan)

普門 暁（ふもん・ぎょう／1896－1972年）

奈良市生れ。川端画学校に学ぶ。個展を開催、石井柏亭に認められる。1918年二科展に初入選。20年未来派美術協会を結成。27年産業美術研究所を設立。大阪で没、76歳。

澤部清五郎 《座せるシュザンヌ》

圧倒的な画格！ 裸婦の視線に釘づけ！

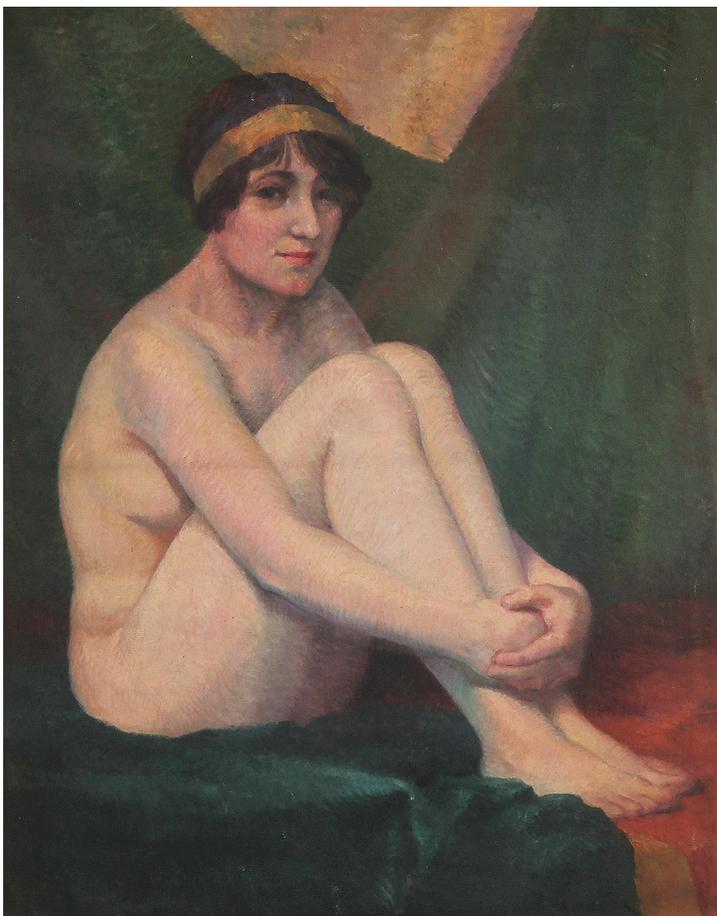
この圧倒的な画格を誇る作家を知る人はいるだろうか。その画家の名は澤部清五郎という。装飾織物の原画制作者、室内装飾デザイナーとしては日本を代表する人物として知られているが、青年期は浅井忠門下の俊英として活躍していた。しかし、その洋画家としての存在は今では忘却の彼方である。その中で具眼の士、星野桂三氏（京都 星野画廊）が発掘顕彰してくれたのである。この作品は澤部が二八歳の留学時代（一九一〇―一九一三年）のもので、帰国後初の個展（一九一四年、大阪三越呉服店）にも出品されている幻の代表作である。目黒区美術館の山田敦雄氏の調査によって題名は《モデル座セルシュザンヌ》であることが判明した。個展出品中、最大の三〇号は三点あったが、うちの一点は行方不明、残り二点のうち一点の《ハドソン河》が千葉県立美術館に収蔵されており、この作品は新発見となった。星野さん、山田さんに感謝である。聖護院洋画研究所から関西美術院時代の盟友であった安井や梅原に匹敵する画力がありながら、生活のためとはいえ川島織物に入り、東京に出て専業画家になれなかったことは、自ら語るように無念であったろう。皮肉にも恩師浅井忠と同じ三足の草鞋（洋画、日本画、デザイナー）を履くこととなった。一九九二年に京都と目黒で回顧展が開催されたが、更なる顕彰が必要とされる画家のひとりだ。

平園賢一（神奈川県平塚市）

澤部清五郎 《座せるシュザンヌ》

油彩・キャンバス 91.0×72.7cm 1912年

Sawabe Seigoro *Suzanne Sitting*



澤部清五郎（さわべ・せいごろう／1884－1964年）

京都市生れ。1904年聖護院洋画研究所で浅井忠に師事。06年関西美術院に移り出品。07年文展に入選。10－13年渡米、渡欧。帰国後、関西美術院教授。川島織物に勤務、図案を制作する。64年没、80歳。

土方久功 《孤島》

桁はずれの不思議な巨人、土方の代表作

他に類例のない土方独自のレリーフ彫刻の逸品である。この作品は高村光太郎が絶賛した第二回丸善個展（一九五三年）に初出品された。そして、その後の各展覧会には必ず出品されて来た土方の代表作の一つである。後年、土方はこの作品を水彩画でも描いているし孤島という詩も作っている。かなり思い入れのある作品であったに違いない。光太郎曰く……「土方久功の原始美……妙に心ひかれる。何の遠慮なしに氏の幻想なり、南方の詩が、ある現代感覚のデフォルメを経て気持ち良く表現されており、はなはだいさぎよい。テクニクの方からいうと、浮彫木彫の常識を破って映像を平たく、平たく逆に彫っているのは興味がありこの手法にも成功している。南方土人の骨格なり容貌に深在する美しさがここに……とにかく見るものの心を明るくする」と。知れば知るほど、この作家は不思議で忍耐強くしなやかで強靱であること、そして他の作家とは異なる次元にいたることが実感できる。また、幅広い交友関係も興味深い。画家、彫刻家、詩人としての業績はもちろん、南洋民俗学者としての彼の仕事は群を抜いており、学術的に見ても世界に誇れる偉業なのである。この風変りな規格外の土方久功という人間が残した芸術作品が、今後更なる評価を受けられるように期待している。

平園賢一（神奈川県平塚市）

土方久功 《孤島》

木彫・木 79.0 × 60.0 × 4.0cm 1952年

Hijikata Hisakatsu *Solitary Island*



土方久功（ひじかた・ひさかつ／1900 - 1977年）

東京生れの彫刻家。詩人、民俗学者としても有名。1924年東京美術学校卒。二科展、院展に石膏彫刻を出品。29年パラオに渡り各島の調査研究（南洋庁）。44年帰国後は、南洋に取材したテーマで個性的な木彫レリーフを制作。東京で没、77歳。

近代日本彫刻の傑作・日本一の老婆像

この作品は『近代日本彫刻集成』第二巻（田中修二監修）に収録されており、その解説にはこうある。「近代日本彫刻史において堀進二の存在は隠れがちであるが、戦前の官展から戦後の日展にかけて重鎮として、つねに彫刻界の軸となる地点に立ち、その歴史の流れを支えてきた」。その通りである。第九回文展に《若き女の胸像》《老婆の肖像》《母と子》を出品し褒状を受ける（審査員は山崎朝雲、米原雲海、新海竹太郎、白井雨山、高村光雲）。特に《老婆の肖像》は親友中原悌二郎によって「非常に怜悯な頭脳と周密な注意力とを持っていて日本人によって作られた彫刻の中では傑作の中にかぞえられるべきものだ」と称賛された。この作品の原型は友人の中村彝の所蔵となり後に平櫛田中コレクションに加えられた（現在は東京藝術大学蔵）。うつむいた表情で物思いに耽る老婆。顔面に反射する神秘的な雰囲気醸し出している。堀の徹底した写真とそれに伴う適格な性格描写が示されており、この老婆の人生や心情を細やかに伝えてくれる。首を支える細い身体が不安定な姿勢を強調し、あたかも老いと向き合う人生のドラマを演出しているようだ……願わくばまた、青年期の堀進二の作品に出会いたいものだ。

平園賢一（神奈川県平塚市）

堀 進二 《老婆の肖像》

彫塑・ブロンズ 38.0×18.0×18.0cm 1915年

Hori Shinji *Portrait of an Old Woman*



堀 進二（ほり・しんじ／1890－1978年）

東京生れ。1906年太平洋画研究所に入り、新海竹太郎に師事。11年太平洋画会展に出品、会員となる。16、17、18年文展で連続特選。57年太平洋画学校の復興に尽力し、校長を務める。東京で没、87歳。

川上邦世 《春風駘蕩》

伝説の問題作の出現に皆、驚いたものだ

神尾玲子氏(群馬県立館林美術館)の情熱と尽力により二〇一〇年に群馬県立館林美術館で「中平四郎——師、川上邦世とともに」が開催された。表題のとおり中平四郎がメインだが、夭折の天才彫刻家・川上邦世を知る研究者や一部の熱烈なコレクターにはまたとない驚きであった。川上冬崖の孫で父は外務省勤務、下谷に邸宅を構え豊かな生活だったという。幼少期から竹中光重に彫刻を学び、一二歳で師を凌ぎ、東京美術学校で高村光雲に師事した。大正二年の『萬朝報』には「天才肌で先輩にも依らない、富豪も頼まない、決して世に媚びぬ、作品は売るべき物でないと云うのが主張である。至って呑気な人は……」と評され、大物ぶりを発揮している。兵役後留学する予定が家族の反対で叶わず、それがもとで放浪し大酒のみになったという。豪放磊落、高度な技量と個性光る東洋的作風は同じ天才肌であった佐藤朝山とも比べられた逸材でもあった。大正一四年、三九歳で夭折したため現在まで一一点が確認されているに過ぎない。この作品は川上邦世の幻の代表作であり、当時から賛否両論渦巻く問題作でもあった。この作品の奇跡的とも言える発見のお蔭で、この展覧会に華が添えられたと思う。大正期の院展彫刻には恐るべき才能が数多く出現したが、残念ながら忘却されているようだ。川上邦世の更なる発掘と顕彰が進み「川上邦世展」が開催される日を夢見ている。

平園賢一 (神奈川県平塚市)

川上邦世 《春風駘蕩》

木彫・木 71.0 × 20.5 × 24.5cm 1916年

Kawakami Kuniyo *The Tranquility of the Spring Wind*



川上邦世 (かわかみ・くによ / 1886 - 1925年)

東京生れの彫刻家。1906年東京美術学校卒。高村光雲に師事。07年第1回文展に出品。16年院展に初入選し、戸張孤雁、中原悌二郎とともに院友推挙。18年院展試作展にて奨励賞。25年没、39歳。弟子に中平四郎などがある。

植木 茂 《合》

戦後抽象木彫のパイオニア

抽象彫刻を愛するコレクターにとって、植木茂は避けて通れない関所のような存在である。特に日本の抽象木彫の世界において、私にとっては砂澤ビッキの兄貴分的な存在としていつも君臨していた巨星である。しかしながら、その代表作ともなると、そのほとんどが美術館に入ってしまったっており、市場には出てこない玄人好みの作家でもある。まさに植木は日本の抽象彫刻の開拓者であり、権威や権力に媚びず自己の信ずる道をひたすら歩いた骨太の生涯は、作家魂そのものであった。彫刻コレクターにとって植木の大型抽象作品は幻なのだ！ 長い間、その出合いを待ち望んでいたが、ようやく美神が微笑んだ！ 『絵のある待合室』で植木のブロンズ作品を掲載していたところ、私の強い植木への芸術思慕のコメントを目にした京都の画商が連絡をくれたのだ。かなり前に大阪の個人コレクターから小磯良平作品といっしょに買い取り、売らずに自宅の玄関に展示していたという。来歴は不明とのこと。画像からはその出来が素晴らしいことがすぐに分かった。早速、学芸員諸氏に問い合わせて調べてみると、やはり個展出品であることが判明した。作品が掲載されている現代彫刻センターのパンフレットが出て来たのだ。二〇一四年に島根県立美術館で展覧会があったばかりでもあり、植木の再評価の機運が高まっている。この作品も近い将来、どこかの展覧会でお披露目ができたらいいと思っている。

平園賢一（神奈川県平塚市）

植木 茂 《合》

木彫・木 96.0 × 40.0 × 33.0cm (台座含む) 1967年

Ueki Shigeru Gō (Match)



植木 茂 (うえき・しげる / 1913 - 1984年)

札幌生れ。1935年自由美術家協会展に出品。50年モダンアート協会の創立に参加。戦中は合成樹脂で彫刻を行う。戦後、木彫の抽象彫刻を制作。晩年には、モビール、アッサンブラージュも制作した。大阪で没、71歳。

奇智とユーモアと自由な発想と

桂ゆきの本は夢があり、とても楽しい。ある時『余白を生きる——甦る女流天才画家 桂ゆき』を読んでいると、掲載写真の後ろにこの作品が写っていた。おそらく気に入って身近に置いていたものであろう。本人は画家でもあり作家でもある。『女ひとり原始部落に入る』では、毎日出版文化賞を受賞している。

《身边雑記》は初期に描かれたカラージュ表現の作品である。四等分された背景の中にお札、小判、宝船、タワシ、布、数種類のレース布、シール、野菜、花と葉など日常身边にあるものを合成して、まったく異なるスッキリした空間を創り出している。このように変幻自在で不思議な絵は、とても興味深い。

画家は旅を愛し多くの人と交流し、人間社会を鋭くとらえたうえでユーモアを交えた作品とした。また一九四〇年頃に、このようなカラージュ表現に取り組んだことにも驚かされる。人、もの、生きものを扱った画風でも、子どもの頃のものと同様までのそれぞれの時期により、大きく変化している。

桂ゆきは、本のタイトルが示しているように、天才であったといえるかもしれない。

和田孝明（埼玉県川越市）

桂 ゆき 《身边雑記》

油彩・キャンバス 90.0 × 72.0cm 1940年頃

Katsura Yuki *Miscellaneous Memories of Personal Life*



桂 ゆき（かつら・ゆき／1913－1991年）

東京生れ。アヴァンギャルド洋画研究所に学ぶ。1938年九室会創立会員。46年女流画家協会創立会員。50年二科会会員。渡欧米、アフリカ旅行。現代日本美術展で最優秀賞。山口県立美術館、下関市立美術館で回顧展。東京で没、77歳。

北川民次 《仲間の画家たち》

独自の道を歩んだ異色の画家

北川民次は、二三年間アメリカとメキシコで生活し、メキシコの絵画や人々のくらし等を日本に紹介した第一人者である。またメキシコでは野外美術学校校長として教鞭をとり、日本では名古屋で児童等の美術教育に熱心に取り組んだ。このように国内外で児童美術教育と画業を両立させた画家は、ほとんど他に見当たらない。

本作品は民次を中心にして、そのまわりを囲むように友だちの画家が楽しそうに描かれている。特に自分や他の人を、おだやかに表現している絵はともめずらしい。このメモには何が書かれているのか。仲間の画家は誰なのか。左上の小さな人は？ひとりひとりを調べてみたくなる。この描かれた画面の中から自分は画家として、仲間たちと力を合わせて強く生きていくという決意と、仲間を大切にしている心根が伝わってくるようだ。

民次の作品には長く過ごしたメキシコでの生活のにおいと力強さ、やさしさときびしさが滲みでている。そして六〇年を越える画業の中で晩年は、愛と人間をテーマに作品を描き続けた。北川民次は、独自の道歩んだ異色の画家なのである。

和田孝明（埼玉県川越市）

北川民次 《仲間の画家たち》

油彩・キャンバス 65.5×80.0cm 1948年

Kitagawa Tamiji *Fellow Painters*



北川民次（きたがわ・たみじ／1894－1989年）

静岡県生まれ。早稲田専門学校中退。1914年渡米。24年メキシコ国立美術大学卒。31年タスコに野外美術学校を移転し、校長を務める。36年帰国。37－79年二科会会員。52年創造美育協会を創立。愛知県で没、95歳。

岩崎勝平 《ひじつく》

「神様絵かき」といわれた画家

私は、現職の頃から絵画をみるのが好きであった。そして退職記念に洋画を手に入れたと思い探していた。しばらくして川越にあるK画廊で《ひじつく》に出会った。画廊主の話によると、画廊仲間の集まりで「この絵は川越生まれの勝平の作品なので、あなたが持っていきなさい」ということになって手に入れたそうである。その絵をみると画品もよく同郷ということも重なり、気に入る、すぐに退職記念画とすることにした。

文豪川端康成は、勝平の絵画へのかかわり方や美に対する想いなどを感じとり、親しみをこめて「神様絵かき」と話していたという。また私の友人の一人は中学生の時、勝平に絵を習っていた。「勝平先生は個性があり、熱心に指導してくれて、誇り高い人であった」と話してくれた。勝平は、全体的に緊張感あふれる人物画を数多く描いている。それらと異なり本作品は若々しい肌、赤い頬、色調を抑さえ心なしか、もの淋しい風情をただよわせている。そして火鉢に肘をついている少女のポーズも、ひかえめながら情感にあふれ、勝平の人物画家としての本領がよく発揮されている。

和田孝明（埼玉県川越市）

岩崎勝平 《ひじつく》

油彩・キャンバス 53.0×45.5cm 1932年

Iwasaki Katsuhira Resting Elbows



岩崎勝平（いわさき・かつひら／1905－1964年）

埼玉県川越生まれ。1930年東京美術学校西洋画科卒。36年文展鑑査展で選奨。37年新文展で特選。39年春台展で岡田賞。47年から京橋の繭山龍泉堂に出入りし、川端康成、河北倫明らと親交する。64年没、59歳。

伊原宇三郎 《ロシア貴族ガロチェンコ夫人》

昔、二人の画家が描いた絵

数年前、神田にある画廊でこの作品に出会った。モデルがすてきな外国人であることと、落ちついた雰囲気を感じた。ちがいが強く印象に残った。

我が家に来てから居間に置き、しばらくながめていた。日が経つにつれてこの夫人画は、画家の緻密に積み重ねられた思考と、油彩への深い理解による高度な技巧によって、描かれていくことが伝わってきた。そのためか一〇〇年近くたった現在でも輝きを失っていない。作品をみたあとにも心に強く残るのは、画家が夫人の内面まで見事に画面に描き出し、表現しているからだと思われる。

同世代の画家、三上知治も一九二七年、第八回帝国美術院展覧会に本作品と同じモデルの夫人を《白衣の女》と題し、出品して入選している。二人の画家が若い頃エコール・ド・パリ時代のフランスで学び、同じ場所で描いたガロチェンコ夫人の絵が現存していることについて、めぐりあいというものを感じてしまう。

伊原宇三郎はヨーロッパで学んでいる時、西洋絵画の伝統を正しく身につけようとしていた。本作品も西洋絵画のもつ文化を感じとることができ、惹かれてしまう。

和田孝明（埼玉県川越市）

伊原宇三郎 《ロシア貴族ガロチェンコ夫人》

油彩・キャンバス 60.6 × 50.0 cm 1925年

Ihara Usaburo *Russian Aristocrat Countess Galchenko*



伊原宇三郎（いはら・うさぶろう／1894 - 1976年）

徳島市生れ。1920年帝展に初入選。21年東京美術学校西洋画科卒。25 - 29年農商務省から渡欧。29、30、32年帝展で特選。32 - 44年東京美術学校助教授。49年日本美術家連盟初代委員長。東京で没、81歳。

萩谷 巖 《マダムX》

エコール・ド・パリの華

萩谷巖の豊潤で典雅な油彩画が好きである。風景画や静物画が多く描かれているが、最高のモチーフは人間である。西洋絵画と言えば人物画である。アカデミー・コロロッシユのシャルル・ゲランの教室へ通い、モンパルナス界隈に住んだ彼は、よく学び、よく遊びの人であったと言う。本作は、時代の香りと作家の技量がよく表現された傑作である。

佐藤裕幸（東京都品川区）

萩谷 巖 《マダムX》

油彩・キャンバス 73.0×50.0cm 1930年

Haginoya Iwao *Madam X*



萩谷 巖（はぎのや・いわお／1891－1979年）

福岡県生れ。1908年白馬会葵橋美術研究所に学ぶ。18－20年光風会展に出品。22年渡仏。シャルル・ゲランに師事。サロン・ドートンヌ会員。再三渡仏。個展を中心に活動する。東京で没、88歳。

木下孝則 《婦人像》

都会のエレガンス

一九三〇年協会創立会員で同士が佐伯祐三、前田寛治と言えば、画風は、フォービズムかと思っ
てしまう。ところが、木下孝則は、純粹な写実表現を目指したそうである。

彼は、細身の女性が好みでモデルによく使い、作品を仕上げる際にあまり描き込み過ぎない
ように筆を置くタイミングが良かった。それが、絵が生き生きと見える所以ではないかと思う。

佐藤裕幸（東京都品川区）

木下孝則 《婦人像》

油彩・キャンバス 91.0 × 72.8cm 制作年不詳

Kinoshita Takanori *Portrait of a Woman*



木下孝則（きのした・たかのり／1894 - 1973年）

東京生れ。1918年京都帝大、19年東京帝大中退。24年二科賞。26年「一九三〇年協会」創立会員。27 - 30年春陽会会員。28 - 35年渡欧。36年一水会創立に参加。個展で発表。横浜で没、79歳。

宮本恒平 《婦人像》

洗練された優雅さ

作者不詳で出品されていた本作を見て、すぐに宮本恒平の作品とわかった。彼は裕福な家庭に育ち、東京美術学校を三〇歳にして悠々と卒業した。

モデルの衣服や装飾品、机上の花や室内の様子を見て生活のレベルが理解できる。経済的に苦勞することがなく、豊かな人生を歩んだ彼は、自由度が高く、幸福な生涯を送ることができた。

佐藤裕幸（東京都品川区）

宮本恒平 《婦人像》

油彩・キャンバス 63.5 × 63.5cm 1949年

Miyamoto Kohei *Portrait of a Woman*



宮本恒平（みやもと・こうへい／1890－1965年）

東京生れ。1920年東京美術学校西洋画科卒。21－23年外遊。26－29年帝展に出品。30－36年渡欧、渡米。帰国後、春台美術展、太平洋画会展、光風会展に出品。65年没、74歳。

甲斐莊楠音 《太夫道中図》

妖艶な太夫の秘めた官能

この作品を家の中で見つけたのが今から三〇年ほど前のことで、島原太夫の道中図であることは一目で分かった。この絵を見たとき、その毒毒しさと妖艶さに驚き、横溝正史の作品を思い出した。太夫のどこか冷めた表情と禿かどろの不思議な笑み、対照的に細かく描かれた着物と孔雀の羽、このバランスがよりミステリアスな日本画という印象を受けた。日頃見慣れていた美しく凛とした女性ではなく、不安定な歩みと見物人を見過ごす冷めた表情が、私に對して「この世界が解るか」と言わんばかりであった。この絵は京都の画家によるものと推察し、インターネット検索もない時代なので、図書館で『美術年鑑』を探し、その物故作家欄で甲斐莊楠音を発見した。この作家は「醜い絵」と酷評されながら自身が女性的な男性であるがゆえに見えてくる女性の醜い部分を描き続けた。その後、日本画家としての自分の居場所を失い、映画界に身を転じ、溝口健二監督のスタッフとして時代考証を担当し、「雨月物語」に代表される溝口健二の世界を支えるに至った。

この作品を観るとヒロードの表具が妙に不気味で、「シャーン、シャーン」と音を響かせながら禿と共に、絵の中から太夫が歩き出して来るような不思議な世界に引き込まれてしまう。平成九年京都国立近代美術館で「大正日本画の異才——いきづく情念 甲斐莊楠音展」が開催されたとき、美術展の準備段階で多くの太夫の写真が確認され、美術館側が探しておられた太夫図の一つがこの作品である。

橋本昌也（京都府京都市）



甲斐莊楠音 《太夫道中図》

日本画 絹本着色・軸 101.5 × 37.0cm 1924年頃

Kainosho Tadaoto *Tayu Dochu (a Parade of High-Ranking Courtesan)*

甲斐莊楠音（かいのしょう・ただおと／1894－1978年）

京都市生れ。1915年京都市立絵画専門学校卒業。24年国画創作協会会員。28年「新樹社」を結成。40年映画界に転身。56年「山賊会」の活動を通じて絵画を発表する。78年没、83歳。

戦後の焼け野原の中で、菅彦は偉人への想いを馳せた。

私がこの作品に出会ったのは五、六歳頃で、再び目にしたのは二六歳の時です。若輩者の私は、日本画のことも知らずましてや作家名など知る由もありませんでした。唯、後ろ姿でありながら何処となく温かく春の息吹を感じさせてくれるところが好きで、その墨の濃淡が柔らかい雰囲気を醸し出しています。作者が「菅彦」と判明しても真贋は定かではありませんでしたが、この絵を観るといつも心が和むため、私は真筆であると強く思っていました。その後、田能村直入の作品鑑定の機会を得た時、直入指定鑑定人田能村直外氏よりこの作品が真筆であることを教えられ、私自身の感性が間違っていないことも褒められ大いに喜んだのです。以降、作者の名前・評価額にとられずに作品を鑑賞しようと努力し今日に至っています。私にとってこの絵は、美術品を鑑賞するという新しい世界を教えてくれた作品であります。

橋本昌也（京都府京都市）

菅 彦 《高士観梅図》

日本画 紙本淡彩・軸 103.0 × 30.0cm 1949年

Suga Tatehiko A Nobleman Viewing Ume Blossoms



菅 彦 (すが・たてひこ / 1878 - 1963年)

鳥取市生れ。父に日本画を学ぶ。1912年大正美術会設立に参加。最も大阪らしい画家。58年日本芸術院恩賜賞受賞（日本画家としては初めて）。62年初の大阪市名誉市民。大阪で没、85歳。

荒井陸男 《M氏の肖像》

肖像画は画家の本領・独行の洋画家

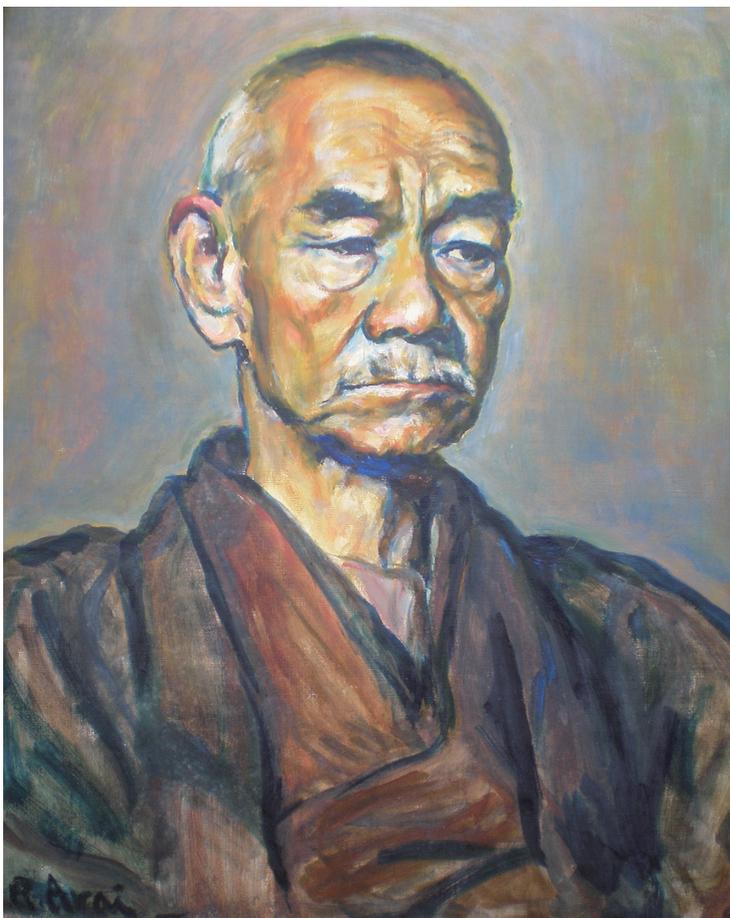
サインが読めるのに作者不詳《男の肖像》としてネットオークションに出品されていた作品、山陰地方の画商さんから落札購入した。画家作品は既に小品四、五点を持っており作者はすぐに判ったが肖像画は持っていないかった。昭和初期、明治神宮外苑聖徳記念絵画館に《旅順開城、乃木大将とステッセル会見の図》（水師營の会見）を納め知られたが、無所属の孤高独歩の画家であったので忘却されたのであろう。海洋画、肖像画に定評があり特に肖像画は画家の独自分野で、徳川公爵や戦後は米軍将校、最高裁判所長官などを描いている。晩年、中国に招かれ依頼され描いていた完成間近の毛沢東の肖像画を自宅の火事で焼失してしまうという残念な記録もある。旧幕府海軍奉行荒井郁之助の六男に生まれ明治四二年に渡英しウォルター・シッカーがホイッスラーの支援で始めたロンドンの美術学校に学んだという異色の経歴を持つ。この学校は夜間部もあったが画家の学んだ仔細は不明である。さて入札時不明のモデルも現物到着後まもなく判明した。箱の隅に小さく〇〇肖像と苗字が鉛筆で書かれていたのを手掛かりにする保守系政治家にたどり着いた。高齢に見えるが晩年七〇歳頃の肖像と考えられる。策士として知られたが閣僚の経験はない。この肖像が描かれた頃、保守合同が成立、その最大の功労者と政治的に評価される人物、小説『青春・都の西北』の主人公でもある。画家より一歳年長であったが描かれた経緯は不明である。

福井 豊（東京都荒川区）

荒井陸男 《M氏の肖像》

油彩・キャンバス 53.0×45.5cm 1955年頃

Arai Rokuo Portrait of Mr. M



荒井陸男（あらい・ろくお／1885－1972年）

東京生れ。1909年渡英、シッカート美術学校に学ぶ。11年同地の新聞雑誌に挿絵を寄稿。14年第一次大戦中は海軍従軍画家として記録画を制作。23年帰国。28年聖徳記念絵画館の《日露役旅順開城》制作。東京で没、86歳。

富士山専門に描いて知られていた写実洋画家

キャンバス裏に題名のほか副題として「三ツ峠にて昭和十四年」と墨書きされている。富士山のビュースポットとして知られる三ツ峠は三ツ峠山とも言われる山梨県河口湖北東にある開運山、御巢鷹山、木無山の三つの山頂の総称、最高点一七八五メートルである。この頃執筆された太宰治の短編『富嶽百景』はこの山を井伏鱒二と登ったことが創作背景にある。神奈川県個人より購入、画家作品はこれを含めて大小五点を所有している。戦前戦後を通じて政官財各界に支持され生前は金銭的評価も高い画家であったが、近年は生没すら不詳の忘却された画家となり美術年鑑類からその名も脱落している。画家は昭和一二年、実業家渋谷正吉の依頼により独総統ヒットラー、伊首相ムッソリーニ、満州国皇帝溥儀に贈呈する富士山を描いておりファシズムや植民地と結びついたイメージがあるが、スカルノ大統領ら十三ヶ国元首への贈呈画を描いたという。また天皇台覧、皇室買い上げ、伊勢神宮貴賓室掲揚などの荣誉経歴も国家象徴としての富士山が国粹主義や民族主義との結びつきを想起させる。画壇や一般庶民とは無縁の富士山専門写実画家だったことも日本近代洋画史脈絡からの乖離があり、さらに長命のため忘却されたのであろう。近年、再評価を期した福岡県柳川市による画家作品展覧と調査研究により、ようやく没年が特定された。

「富士には月見草がよく似合う」

福井 豊（東京都荒川区）

龍 駿介《海内第一の山》

油彩・キャンバス 50.0×61.0cm 1939年

Ryu Shunsuke *The First Mountain in the Whole Country*



龍 駿介（りゅう・しゅんすけ／1889－1988年）

福岡県生れ、龍清六。遠山五郎、山本森之助、南薫造に師事。川端画学校に学ぶ。1927、29、30、37年光風会展、29年白日会展入選。31年伝習館と柳川高女で個展。35年改名。38年以降、富士山を専門に描く。東京で没、99歳。

松山忠三 《お城の花屋》

英国地方風景を描いて帰化した水彩画家

英国の地方にある城塞を背景に花売りがご婦人と談しながらワゴンの上の花を商売している。海外のネットオークションで英国の画商より購入した。サインは R. C. Matsuyama 1913 とある。R は RYUSON の略、雅号の「柳村」であり、後の帰化登録簿もダブルネームで使用されている。雅号の由来は推測であるが画家の出身地が青森県板柳町であることであろう。画家は一九一一年、水彩画の本場を目指して師の丸山晚霞とともに渡英した。その二年後の制作である。英国の女性と結婚し一九一六年ロイヤル・アカデミー初入選、一九一九―二〇年連続入選して英国水彩画協会の会員となり雑誌『カラー』に何度も掲載されるような画家となった。しかし第二次大戦勃発後は敵性外国人として戸外の写生まで禁止されるなどの扱いを受ける。戦後は望郷の念を抱きながらも一九四七年に帰化手続きを取り、帰国することなく一九五四年七三歳で没した。以降、日本は勿論、英国でも顧みられることなく長らく忘れられた画家となっていた。現地での画家の再発見と調査研究、作品収集をされたのがロンドン漱石記念館館長の恒松郁生氏であった。一九九六年には青森県立郷土館で収集品による初の遺作展が開かれ、これにより二〇〇六年開館の青森県立美術館も開館前から作品収蔵に動いた。二〇一六年九月、私費で運営されていたロンドン漱石記念館が閉館されるという報道を聞いて残念に思っている。

福井 豊（東京都荒川区）

松山忠三 《お城の花屋》

水彩・紙 35.5 × 25.5cm 1913年

Matsuyama Chuzo *The Flower Shop near the Castle*



松山忠三（まつやま・ちゅうぞう／1880－1954年）

青森県生れ。水彩画講習所に学ぶ。太平洋画会展に4回出品。『みづゑ』に作品掲載。1911年渡英。ロイヤル・アカデミーを中心に出品を続け、英国で活躍。英国の美術雑誌に作品掲載。英国籍を取得。英国で没、73歳。

三迫星洲 《北京の角楼》

従軍画家そして世界に名高き？ 探険画家

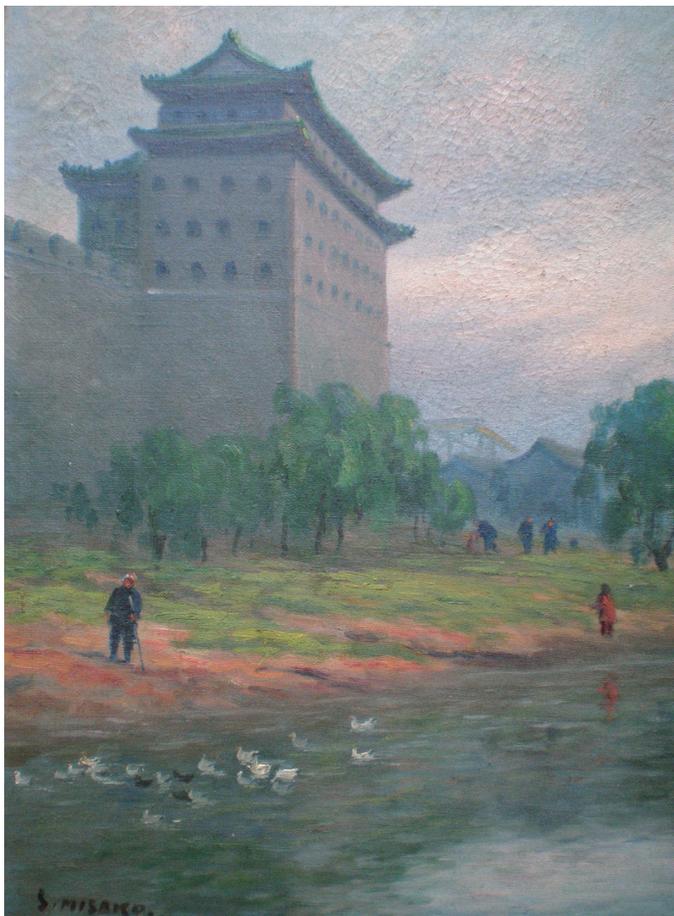
北京の内城外壁の四隅にあった角楼である。内城外壁には他に九つの門があり共に一部を除いて一九五〇年代以降取り壊された。外壁の跡に沿って地下鉄環状線が敷設され撤去された門は駅名の名称としてのみ存在する。角楼は東南のみ保存されているがこの絵の角楼の位置は不明で特定できていない。戦前戦中の満州関係資料として絵葉書を収集しているが、写真以外の従軍画家の描いた絵葉書の中でよく目にするが今も経歴の判らない画家に三迫星洲がいる。原画も見たことはなかったが、ある日ネットオークションに出品されたのを競争して落札入手したのが掲載作品である。画家の絵葉書の多くは画面にサインと年記があるがこの絵には年記がない。絵葉書集はタイトルのある袋付きだが、バラも含めこれを辿ると画家の足跡を少し捕捉することができる。以下鍵括弧付きは絵葉書集名。一九三一―三五年、「世界に名高き探険画家・三迫星洲画伯・満州写生画集」（陸軍恤兵部発行含む）。一九三三年、「昭和七・八年満州事変戦役・三迫星洲画伯従軍の作・皇軍誉の戦況」。一九三四年、「探険画家三迫先生写生画集・南洋風景風俗」（A宮原商店、B中島百貨店・パラオ支庁検閲済）。一九三七年、「従軍画家三迫星洲筆・明朗北支写生画集」。一九四〇―四二年、「探険画家三迫星洲画伯筆・大東亜共栄圏写生画集」。軍部主催の美術展にも出品歴がなく絵葉書専門の画家なのであるか。それとも謎の覆面画家なのであろうか。

福井 豊（東京都荒川区）

三迫星洲 《北京の角楼》

油彩・キャンバス 45.5 × 33.5cm 1940年頃

Misako Seishu A Corner Tower in Beijing



三迫星洲（みさこ・せいしゅう／生没年不詳）

従軍画家、探険画家と称した外地風景風俗絵葉書で知られる。取材地は、1931年露満国境ゴビ砂漠、32―33年満州事変従軍、34年南洋諸島、35年満州、36―37年北支、39年台湾、40年大東亜共栄圏の東南アジア各地。

古嶋松之助 《雪の日本橋》

軍事郵便絵はがき原画最多級にして不詳画家

日本の中心、起点である日本橋、現在の石造二連アーチ橋は一九一一年の竣工。画面左の赤レンガ帝国製麻ビルは辰野金吾の設計で翌一九一二年の建設。一九六四年の東京オリンピックに先立ち都心交通混雑緩和のため一九六三年、首都高速道路がその上を跨いで美観が今も議論される。皮肉なことに一九七四年、橋は重要文化財に指定されるがコントラストの赤レンガビルは一九八七年、老朽のため解体された。図の傘をさした人々が行き交う描かれた日本橋はそのような意味でも良い時期に描かれたと言えるだろう。画家の名は現在の名鑑類には見当たらず手持ち資料で一九五七年版『現代美術家名鑑』に世田谷玉川奥沢の住所と国際観光美術協会幹事、新世紀美術協会会員の記載があるが同じ発行元の一九六一年版の『美術家名鑑』には記載がない。しかし一九六八年に日本橋三越で開催の元海軍従軍美術家記録作品展覧会に従軍作品を数点出品、その図録住所録には横浜市磯子区の記載があるのでこの頃まで存命であったと考えられる。また一九四〇年頃発刊された『海軍館大壁画史』という本には古嶋松太郎という画家が描いた日露戦役《仁川沖の海戦》という図の掲載があるが、サインが同じで同一人物と考えられるが確証がない。画家の描いた色紙数点と戦後に発刊されたと考えられる単色スケッチの伊豆大島観光絵葉書集を資料として持っている。せめて生没年と出身地だけでも判明できないものだろうかと思っている。

福井 豊（東京都荒川区）

古嶋松之助 《雪の日本橋》

水彩・紙 35.0 × 50.0cm 1955年頃

Furushima Matsunosuke *Nihonbashi Bridge in Snow*



古嶋松之助（ふるしま・まつすけ／生没年不詳）

洋画家。東城鉦太郎に師事。第二次大戦中、満州、中国北部中部に従軍画家として赴き、多くの軍事郵便絵はがきの原画を描いた。1941年第2回聖戦美術展、41-44年第5-8回海洋美術展に出品。

栗原忠二 《大運河の夕暮れ》

英国風景と夢見るヴェニスで知られた洋画家

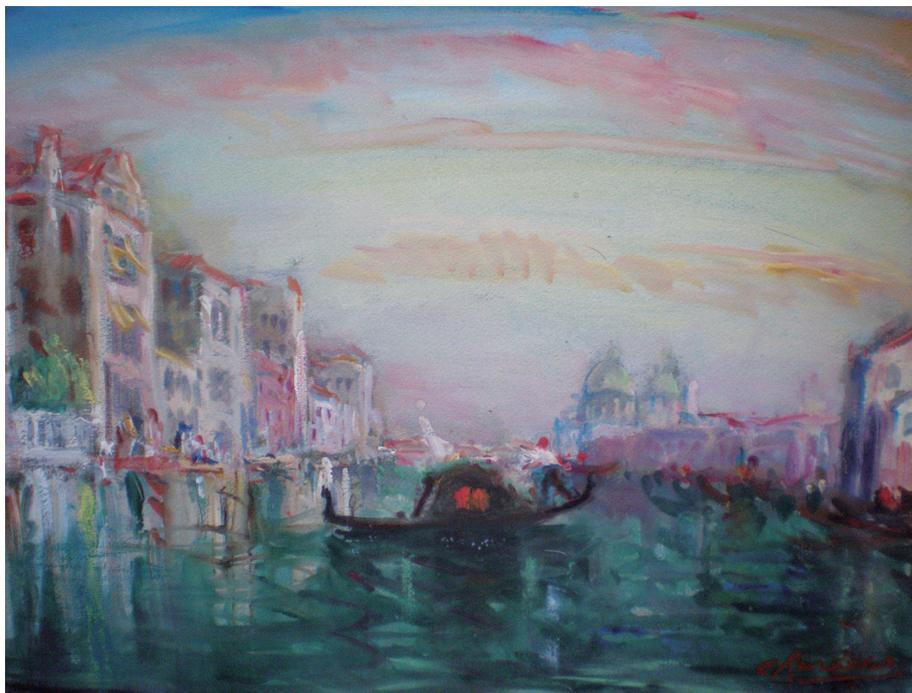
この画家の作品や資料の収集と研究を始めてもう四〇年が経つ。二七、八年位前になると思うが当時は会社員であった私は休日を利用して京都に出かけた。知恩院門前通りの骨董店から博物館、美術館などを巡りH画廊を訪れてこの画家作品について聞くと、寺町通りの古美術店に値段が高いが良いヴェニスの水彩画が一点あると教えてもらいその足で向かった。見ると大運河のアカデミア橋から見たサンタ・マリア・デラ・サルターテ寺院の遠景を右手に望む夕景である。値段を聞くと確かに高い、手持ちも無い、しかし買い逃したくはなかった。そこで当時非常に持っていた昭和天皇在位六〇周年記念一〇万円金貨を内金に置いて帰ったが三分の一にも満たない金額であった。一週間後残金を持って再び京都へ出かけ入手したのがこの絵である。この絵は一九九一年、静岡県立美術館で開催の「静岡の美術Ⅳ・栗原忠二展」に出品することができた。その後のH画廊ホームページによると、「その店の主人は若い頃に絵描きを目指して関西美術院で油絵を学んだが絵描きでは食えず途中で古美術に開眼して店を営むようになったそうだ。関西美術院関係の画家たちの小品がよく飾っており、楽しみな店だったが、主人が急死し、店は畳まれた。後で聞くと寺町通りに古い油絵が山のように打ち捨てられて、通りがかりの人が持ち帰り自由のような有り様だったという。残念なことをしたものだ」と記載されている。

福井 豊（東京都荒川区）

栗原忠二 《大運河の夕暮れ》

水彩・紙 25.0 × 34.5cm 1925年頃

Kurihara Chuji *The Grand Canal at Dusk*



栗原忠二（くりはら・ちゅうじ／1886－1936年）

三島生れ。1912年東京美術学校西洋画科卒、渡英。ブラングインに師事。王立美術家協会準会員。24年帰国、白日会創立会員、日本水彩画会会員。26年再渡英。第一美術協会創立会員。築地洋画研究所を設立。東京で没、50歳。

ヴィンセンシオ・山崎 《城壁のある町》

明快大胆の線と色で描く欧州風景の画家

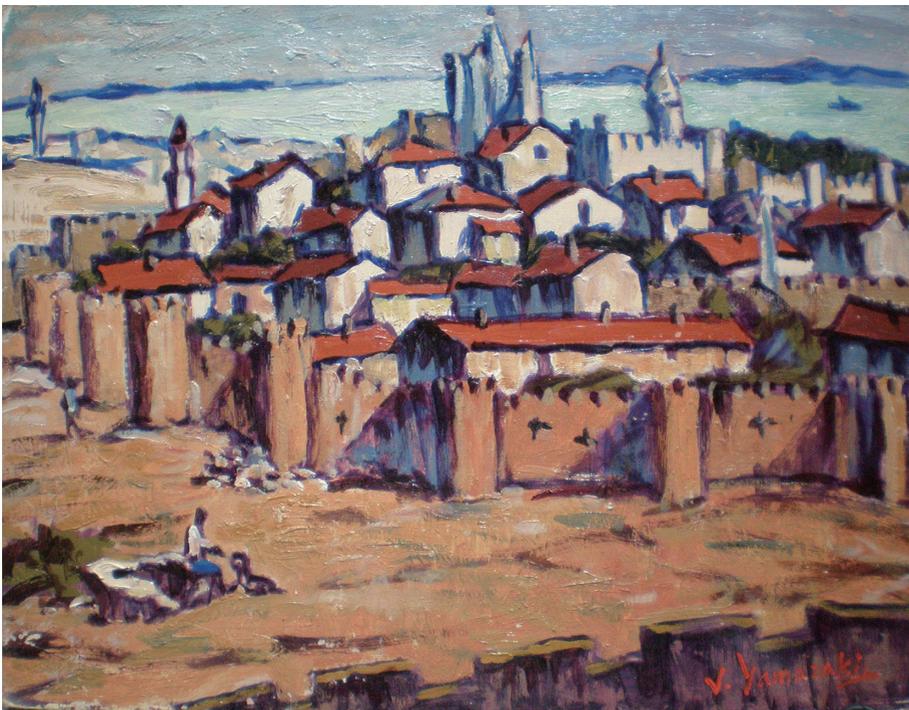
スペイン・マドリッド西北西一〇〇キロメートルにあるアビラ、標高一一三〇メートルの高所にあるが人口は五万人。一一世紀にイスラム勢力に対抗するために造られた要塞都市。旧市街を囲む城壁は全長二・五キロメートル、高さは一二メートルある。遠く青い山々が見えてその間に白い雲海が低く横たわる。大聖堂や修道院があり多数の塔も聳える。城壁の外には愛犬家もいるが画家自身が愛犬家であったので描き加えたのであろう。画家は東京・蒲田に生まれが静岡県揚原村で幼少期を過ごした。県立商業学校を卒業、上京し小西正太郎の神田錦町自由研究所で素描を学んだのち川島理一郎に師事した。独立美術展は一九三一年の第一回から四回まで連続入選し戦前に渡欧したとされる。一九四一年には火野葦平らの九州文化連盟に参加。戦後は米軍専属画家となるが後に戦前より滞日のフェデリコ・バルバロ神父の助手となり洗礼を受けサレジオ会専属画家となる。ヴィンセンシオは洗礼名。一九五七年に渡欧して主としてヴァチカンに居住した。滞欧中ローマ、ミラノ、フィレンツェにて十数回の個展を開催、一九七〇年に帰国して豊島区要町に居住した。以降も度々渡欧して海外個展六回、国内個展十数回を開催した。国内の個展案内には作家で僧侶の今東光が推薦文を寄せている。文と絵を著して一九七九年に完成し発刊された『旧約聖書物語』が最後の大事な仕事となった。類型的作品も多いが独特の画風は異色の画家ではないだろうか。

福井 豊（東京都荒川区）

ヴィンセンシオ・山崎 《城壁のある町》

油彩・ボード 32.0 × 41.0cm 1973年

Vincentio Yamazaki A Town with a Castle Wall



ヴィンセンシオ・山崎（づいんせんしお・やまざき／1911－1980年）
東京生れ、山崎正雄。1931－34年第1－4回独立展入選。川島理一郎に師事。
41年九州文化連盟参加。戦後米軍専属のちサレジオ会専属画家。57年ヴァチカン居住。70年帰国し豊島区居住。度々渡欧し内外個展。東京で没、69歳。

相田直彦 《磐梯山の景》

異色の不透明水彩画作品群・弧愁の画家

この絵の額の裏板には「昭和十一年九月 会津翁島附近雑草花盛りなる裾野より磐梯山を見ての作 相田直彦」と自筆で記されている。故郷の山を眺め見て野の花に心の安らぎを感じ取ったのであろう。三〇年以上前、今はない団子坂・森洋画店で購入したものである。故・森共弘氏の筆による題名シールもこの裏板に貼られている。大正二年、二五歳で日本水彩画会創設発起人に相田寅彦の名となっているが、同年一〇月の第七回文展以降は相田直彦の名に変更している。昭和四年以降は不透明水彩グアッシュを使用した作風に変更し当時の帝展では中西利雄とこの分野の双壁をなした。藝林・梅野隆氏はその著『美神の森にて』で「弧愁の画家・相田直彦」と題した章冒頭部分に次のように記した。「近代日本の水彩画は見直さねばならない。ここ数年来、その機運が熟して来ているように思えてならない。明治以降百年の水彩の歴史を回顧する時、文展、帝展で活躍し、特に後年、不透明水彩の特異な画風で知られた相田直彦の画業こそ水彩画壇中の異彩を放っており、今後水彩画家中第一級の人として、顕彰さるべき画人であると信じている。今回、上記の観点より彼の生地会津若松、終熄の地人吉を訪ね、当地に散在した遺作を蒐め、没後四十数年にして初めての遺作展を小舎でささやか乍ら開催することが出来たことは、美術研究を志す私にとり、欣快事と云わねばなるまい」。疎開先で孤独に客死した画家の無念を想う。

福井 豊（東京都荒川区）

相田直彦 《磐梯山の景》

水彩・紙 31.0 × 40.0cm 1936年

Aida Naohiko The View of Mt. Bandai



相田直彦（あいだ・なおひこ／1888 - 1946年）

会津若松生まれ、相田寅彦。太平洋画会研究所、日本水彩画研究所で学ぶ。1909年文展褒状。太平洋会展、文展、帝展に出品。13年日本水彩画会創立会員。29年白日会会員。37年新文展無鑑査。熊本県人吉で没、58歳。

清水良雄 《一本松夕景》

官展三年連続特選の洋画家・童画家

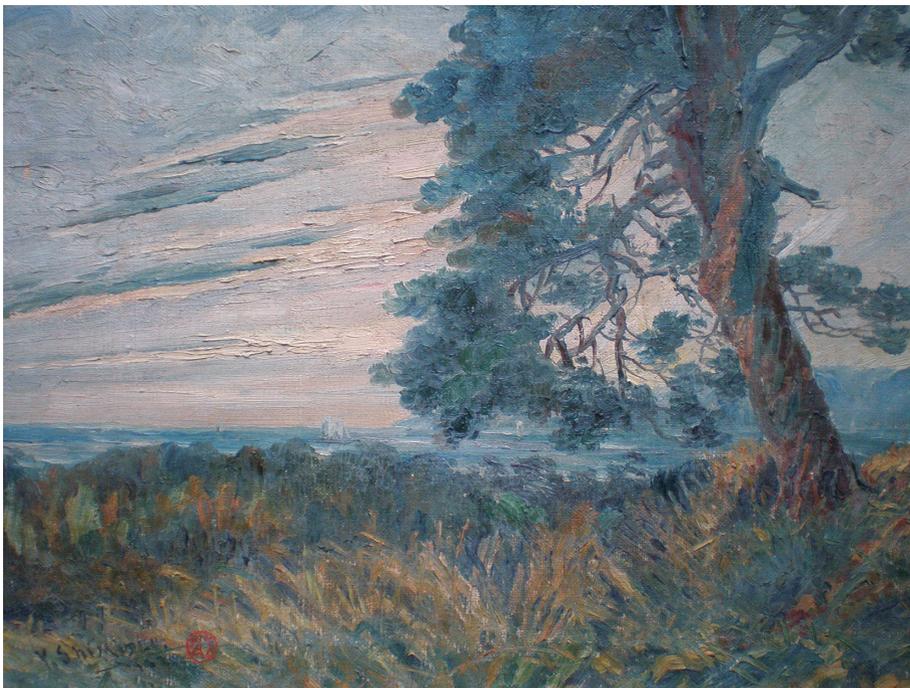
長い歳月の強風に耐え捻じれ曲がった幹を持つ一本の松。遠方は湖であろうか、海であろうか、白い帆船が行き交う。日没が近づくとつれ上空の雲も風に流されて茜色に染まりゆくこうとしている。描いた場所は不明だが一九二〇年の年記のある印象派的作風の絵である。三〇年以上前、团子坂・森洋画店で購入した。画家は東京美術学校在学中の一九一三年、第七回文展に初入選、卒後の一九一七―一八年、第一―二回文展特選、一九一九年、第一回帝展特選と三年連続官展特選を果たしている。一九二二年、第四回帝展にも特選で一九二四年に無鑑査、一九二七年以降は帝展審査員も務めた。一九二七年、光風会会員になっている。この間一九一八年、鈴木三重吉が創刊の童話雑誌『赤い鳥』の挿絵を描いたが、表紙は一九六冊中一六三冊を画家が描いたという。一九二二年創刊の児童雑誌『コドモノクニ』にも参加し一九二七年、武井武雄、初山滋らと日本童画家協会を設立している。戦争画では一九三七年の第一回海洋美術展、一九四一年の第二回聖戦美術展、一九四三年の第一回陸軍美術展、第二回大東亜戦争美術展に初出品し以降も出品して多数の戦争記録画を描いた。一九四五年、広島県芦品郡戸手村に疎開、戦後一九五〇年、広島大学教育学部講師となり地域文化振興に尽力した。一九五四年、広島市で没したが遺産と主要作品が東京藝術大学に寄贈されこれにより記念財団が設立された。墓所は多磨霊園にある。

福井 豊（東京都荒川区）

清水良雄 《一本松夕景》

油彩・キャンバス 33.5 × 45.5cm 1920年

Shimizu Yoshio *A Dusk View with a Pine Tree, Ipponmatsu*



清水良雄（しみず・よしお／1891 - 1954年）

東京生れ。1912年光風会展に入選。13年文展に初入選。16年東京美術学校西洋画科卒。17 - 18年文展特選。18年創刊の『赤い鳥』に挿絵を描く。19、22年帝展特選。27年光風会会員。50年広島大学講師。広島で没。62歳。